

研究論文

スケール性と到達点から見た範囲表現 「～に至るまで」

ルチラ パリハワダナ, 桑平 とみ子

要 旨

表現「～に至るまで」の基本的特徴はある物事の到達点を示すことにより、そこに行き着くまでの広い範囲を表現することである。その表現される範囲にはスケール性を有するものと有さないものが含まれる。本稿で述べるスケール性とは、対象となる事態の最も想定しやすい要素から最も想定しにくい要素への、想定しやすさの度合いにおける段階的移行のことである。

スケール性を有する範囲に含まれるのは、段階的スケール、数量的スケール及び極限的スケールの三タイプである。段階的スケールでは想定可能性の度合いを示す語彙の現れにより、スケール性が生じる。数量的スケールでは、到達点を示す「1」という最小数値の現れにより、当該の数量の全範囲が含意され、その範囲における想定可能性のスケール性が生じる。更に、極限的スケールでは、物事の極限を表す語彙の現れにより範囲の終点が示され、且つその範囲内のスケール性が表される。

一方、スケール性を有さない範囲として時間的範囲及び空間的範囲が挙げられる。また、両者の特徴を含んだものとして、想定できる要素を並列的に並べた範囲表現も見られる。

【キーワード】 範囲, 到達点, スケール, 過程, 限界, 想定可能性

1. はじめに

日本語能力試験1級文法項目⁽¹⁾として位置付けられているものに「～に至るまで」という表現がある（国際交流基金 1994, p.176、友松他 1996, p.28）。「機能語」⁽²⁾として扱われるこの表現において、動詞の表す語彙の意味と助詞「に」及び「まで」の表す意味が結合されている。動詞「至る」の表す本来の意味と、とりわけ助詞「まで」により付加される意味の結合によってこの表現が文法的「機能」を獲得していると言える。

動詞「至る」は到着段階に重点が置かれた動詞であることが宮島（1972）によって既に指摘されている（p.211）。また、日本語記述文法研究会（2009, p.63）によると、「まで」には範囲の終点を表す用法があり、位置変化や移動を伴わない動詞の場合も範囲を含意することが可能である（「50ページまで教科書を読んでおきなさい」⁽³⁾）。このように、助詞「まで」は動詞「至る」と共起し、到達までの範囲の終点を表すと考えることができる。つまり、この範囲は、動詞「至る」の語彙の意味に前述の文法的機能が付加されることによって生じたものであると見なすことができる。

「～至るまで」を含む文が表現する範囲とはいかなるものか考察すると、多くの場合何らかの縮小の範囲であることに気づく。その上、その縮小はスケール性を伴う場合が多い。

では、この表現が表す範囲及びスケールとはいかなるものであろうか。そのタイプや性質を明らかにすることを本稿の目的とする。以下において、論文末に挙げる小説や新聞などから採集した実例を分析することを通して「～に至るまで」の表す範囲を明らかにしていく。

2. 従来の研究

宮島（1972）では動詞「到る」「来る」「届く」などについて「（これらの動詞が表わすのは）本来は、あるいは直接的には、位置の変化であって、ただ、ある全体的なものの先端がある位置までくるところをあらわすことによって、その全体としてのものの増大、拡張を結果的にはあらわしているのである。（p.401,（）内は筆者）」と述べている。更に、「出発点をあらわす「～から」という目的語をとまうことがある。」とし、「いたる」を例に、「出発点が表示されていることは、一応到着の前提として移動の全過程が問題にされているとみてよいであろう。（p.211）」と指摘している。

ここでは先端を有する全過程が描写されており、本稿でも動詞「至る」の意味特徴として到達点のみならず、そこまでの全過程も踏まえて捉えたいと思う。

助詞「まで」について日本語記述文法研究会（2009）は、範囲の終点の用法を持つとし、「移動の動詞とともに用いられる場合には、「まで」は、全行程で継続する動きを表す」と述べている。更に、「『まで』は、位置変化や移動を伴わない動詞であっても、範囲を含意する場合に用いることができる。（p.63）」と指摘している。

森田・松木（1989）は「～に至るまで」を終点・限界点を明確に指し示す表現として位置付けながら、「時間的・空間的範囲を明示する場合が多い（p.33）」ことを指摘している。また、「互いに非連続の個別的なものを順に取り上げながらある地点に至るという範囲のとらえ方もでき（中略）、認識的範囲といったものも表現可能」であると述べ、その例として「日本はやはり男性の天下である。上は大臣から、下は中小企業の課長に至るまで、女性の管理職は数えるほどしかない。（p.34）」を挙げている。

グループ・ジャマシ編（1998）は「Nに至るまで」の意味を、「『まで』とほぼ同じ意味を表すが、細かいすみずみまでの範囲のことがらを言うのに使う。『…から』とともに使われることが多い」と記述している（p.425-426）。

泉原（2007）は時間の範囲を表す用法として「～まで」「～にかけて」「～に至るまで」を比較しているが、その際の基準として、後続する出来事の性質、すなわち「連続する同じ内容」、「バラエティな内容」または「規模の大きい内容」を挙げている（p.215）。しかし、本稿では、異なる立場から時間的範囲の考察を行うことにする。

泉原（2007）は更に、時間以外を表す用法にも触れ、「～に至るまで」について起点から到達点⁽⁴⁾の間に「三つ以上の『段階／順序／序列』があれば、使うことができる（p.216）」と述べている。また、空間的用法について「ただ、現実の規模は小さくても、内容を誇張する場合には多用される（p.216）」としている。

以上取り挙げた先行研究の共通点として、「～に至るまで」という表現が終点を有するある範囲

を示すこと、及びその範囲の中に順序性または序列が見られるということ、の二点が抽出できる。しかしながら、従来の研究において順序性のあり方、またそのあり方を決定する諸要素、文中におけるそれらの明示のされ方についての詳細な分析・類型化は行われていない。故に、本稿では実例の分析を基にそれらの課題を追求したい。

3. 「～に至るまでに」における範囲とスケール

範囲のタイプについての考察に先立ち、本稿で言う範囲及びスケールについてその定義を述べておきたい。

本稿で言う範囲とは時間的・空間的な広がり、または物事の状態の程度や量、あるいは種類の領域である。スケールとは想定可能性の最も高い要素から低い要素までの縮小である。

一般的にスケールは順序性を有した物事の程度・量・状態の拡大、または縮小を意味すると考えられる。宮島（1972）が動詞「到る」について述べている通り、先端を示すことにより、全体としてのものの増大、拡張も表現されると捉えることができる。「～に至るまで」においても先端などの最も想定可能性の低い要素を明示的に述べることによって該当する全範囲が含意される。このように該当領域が最も想定可能性の低い要素にまでも及ぶことを表現することにより、範囲の広さが強調的に述べられる。故に、述語で示される事柄の増大・拡張を表しているとして捉えることができる。しかし、述語の表わす事柄は個別の出来事によって異なるので、統一的な枠組みで捉えることは困難である。従って、統一的な枠組みでの記述を行う目的で、本稿では想定可能性に着目し、文中省略することのできない最小値を示す要素に向かっての縮小をスケールとして捉えることにする。

「～に至るまでに」が表すスケールとはいかなるものなのか、以下の例で見よう。

- (1) フル・マラソン・レースのタイムからトイレット・ペーパーの一回に使用する長さに至るまで、世間には実に様々な種類の標準値が充ちている。 (世界)

上記の例1では標準値を表すものとして「フルマラソンのレースのタイム」及び「トイレット・ペーパーの一回に使用する長さ」が示されている。前者は「～から」を伴うことによって範囲の起点として示され、標準値を表すものの想定しやすい要素の例として提示されている。一方、後者は標準値の対象として想定しにくい要素である。つまり、両者の間には想定可能性の「大」から「小」へのスケールが生じている。このように、「～に至るまでに」を含む文は想定可能性の「大」と「小」を提示することにより、両者間のスケール性を有する範囲を表現するのである。しかも、上記の範囲は何らかの連続性を有した広がりを表すものでなければならない。例えば、例1では、標準値を表すセットのメンバーが連続体の起点及び終点として提示され、その結果広がりを持った範囲が含意されている。

「～に至るまで」の表すスケールを以下のように図表化できる。

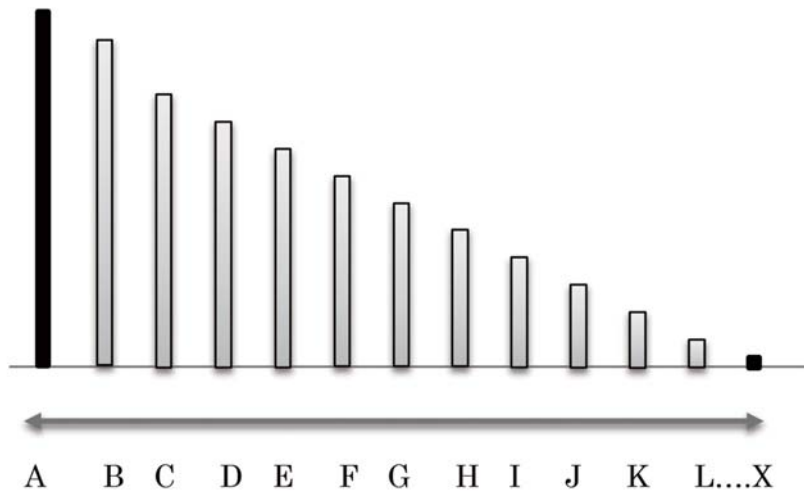


図1 想定可能性のスケール

上記の図のAは最も想定しやすい要素を、一方、Xは最も想定しにくい要素を示している。原則的に、文中明示されているのはその二つのみであるが、それらにより想定可能な他の要素が含意され、その結果、図で示したようなスケール性を有したAからXまでの範囲が生じていると考えることができる。灰色で示してあるBからLまでの含意される要素は具体的なものとして想定されるのではなく、単に(A)・Xと同類の要素が他にもあり、しかもその集合は想定可能性の縮小を示すスケールを成すものであることが表現される⁽⁵⁾。

しかし、スケール性の表現のためには、想定可能性の「大」と「小」を示す両要素が必ずしも1セットとして文中に明示される必要はない。想定可能性の「小」を表す要素のみによってもスケール性は表現可能である。次の例2では、「枝の一本一本」は「奴が精通している」要素として想定される可能性が低い。しかし、「枝の一本一本に至るまで」という表現によって、より想定可能性の高い要素、例えばその地域の道路状況などが含意される。想定可能性の最も低い要素のみに視点を置くことで、対象となる全範囲が含意可能になるからである。

(2) 奴はあのあたりのことは枝の一本一本に至るまで精通している。(砂)

また、4.3節で詳しく取り上げるように、複数の要素を並列することにより、スケール性が生じる場合もある。

では、全ての「～に至るまで」を含む文がスケール性を表すのだろうか。次の例で見てみよう。

(3) 「出会った時から今日に至るまでつらいことも楽しいこともあったが、すべてがあの時間に凝縮されていた。幸せに思いました」(毎日新聞2012年12月11日)

この例は「出会った時」及び「今日」で示されている二つの時点的表現の間の時間的範囲を表している。そこにはスケール性が見られない。上記の例が示しているように「～に至るまで」の表す範囲にスケール性を有するものとそうでないものが含まれる。

では、スケール性を有する「～に至るまで」はいかなる状況の下で現れるのか、そしてそのスケール性とはこういった性質のものなのか、以下において考察する。

4. スケール性を有する範囲

「～に至るまで」が表す範囲のスケール性は語彙的な意味によって極限的スケール、段階的スケール及び数量的スケールに大別できる。まず、その基本的特徴について考察しておこう。

4.1 極限的スケール

極限的スケールの極限は先端的表現、または対義的な表現によって示される。

4.1.1 先端的表現により含意される極限的スケール

次の例4～6が示している通り、「つま先」「指先」「端々」などの先端的表現の語彙的意味にはある極限という概念が含まれている。それらの極限は想定可能性の最も低い要素を示している。一方、「～から」に前接する語彙は想定可能性の最も高い要素を表している。つまり、可能性の最大及び最小という二つの極限概念によってスケール性が生じ、且つ対象となる全範囲が含意されている。

(4) 首から下、足のつま先に至るまで奇妙な男女の顔とか古代の地図にあるような記号めいた図案が一面に彫られている。(楡家)

(5) 端切れを寄せ集めた日本人形には指先に至るまで舞の繊細さが施されている。

(毎日新聞 2013年3月4日)

(6) アニメ的な色彩設定も魅力的で、背景の端々に至るまでの繊細なりアリティーや、テレビシリーズでも話題を呼んだ大胆なアクションシーンで、薄い色の配色ながら原色系の色も使われ、あざやかかつリズムミクな色あいでも場面を盛り上げる。(毎日新聞 2013年2月9日)

4.1.2 対義的表現により含意される極限的スケール

ある事柄の両極限を表す対義語も極限的スケールを含意させることができる。対義表現はある事柄の対立する両極限を表すので、先端的表現に意味的に類似している。対の想定可能性の低い方が「～に至るまで」に前接するが、想定可能性の高い方は文中明示されてもよいが(例7)、省略される場合もある(例8)。

(7) そして、女性はもちろん男性に至るまで、幅広い層へ香りにこだわった新ブランドを訴求し、市場における新たなポジション確立を目指していきます。(毎日新聞 2013年2月28日)

(8) 津波でんでんこ(肉親にも構わず、でんでんバラバラに逃げよ)の実践は、家族相互の深い信頼と、幼子に至るまで、生き延びようとする自覚がなければ成り立たぬ。

(毎日新聞 2013年2月25日)

上記のような対義語は述語の表す事柄が全範囲に対して該当することを強調的に述べるために用いられる。次の例のように全範囲において同程度に述語の出来事が該当する場合はスケール性を表さなくなると言える⁽⁶⁾。

(9) 昔から今に至るまで、そして洋の東西を問わず、恋があり未練がましい思いがあった。

(毎日新聞 2012年4月29日)

4.2 数量的スケール

スケールの想定可能性の最も低い要素として最小値の数値（つまり、1）が現れるのがこのスケールの特徴である。数量として現れる語彙は、金額や長さ、字数など数量的意味合いを持つものであればよい。例10で示されているように「政治資金出入り」の公開の対象となる金額の最大値、すなわち「～から」で示される起点は文中に明示されていない。ここで想定される金額は何兆何億の単位であり得るが、それが明示されずに、「1円」という最小値のみ提示することにより、全範囲が示されている。

(10) 「政治資金の出入りを 1円にいたるまで 全面的に公開し、流れを完全に透明にすることである。 (毎日新聞 2012 年 4 月 27 日)

(11) それでいて、読みの深さ、解釈の仕方は 一語一句に至るまで、その彫刻のノミの跡は繊細で緻密。 (毎日新聞 2013 年 4 月 10 日)

極限的スケールと数量的スケールの実例（例5、6、8、10、11）には共通点が見られる。それは、想定可能性の最も高い要素を明示せずとも全範囲が含意されるということである。その理由は、いずれにおいても想定可能性の最も低い要素として提示されている語彙自体が（例5の「指先」及び例10の「1円」）何らかの対象の極限を語義として有しているからである。

4.3 段階的スケール

ここで取り挙げるスケールは何らかの意味的段階性を有している。例えば次の例12では、「がん」から「糖尿病」そして「風邪」の間に病気の深刻さの段階性を読み取ることができる。この段階性は文中に並列されるいくつかの名詞的要素によって示される。次の例13では「マンガ」「アニメ」などは並列された名詞的要素であり、それらによって人気度の段階が示されている。故に、表現されるスケールは、「世界的に人気が高い日本の現代文化」のジャンルとしての想定しやすさを示すスケールである。

(12) この「被爆者」手帳を交付された人は、がんはもちろん、糖尿病や風邪に至るまで、原則、無料で病院にかかることができます。 (毎日新聞 2011 年 11 月 27 日)

(□ 内は筆者補足)

(13) マンガ、アニメ、ゲームソフト、J-POP、テレビドラマから、若者ファッション、回転寿司にいたるまで、日本の現代文化は世界的に人気が高い。(毎日新聞 2011 年 12 月 2 日)

但し、これらの例の段階性は作者の主観的な判断を伴ったものであり、絶対的段階の序列を示しているとは言えない。

以上スケール性を有する「～に至るまで」の表現について考察してきた。ここでの特徴として認められるのは極限的スケール及び数量的スケールの「～に至るまで」に先行する語彙として先端・対義表現または最小数値を意味する語彙が使われることである。一方、段階的スケールの場合は、先端・対義表現または最小数値を表す語彙に頼らず、並列的に提示された事柄の間に何らかの段階性があることが一般認識によって理解されると言える。また、これらを表す文に「～から」が共起されることが多い。しかし、上記の3節で述べたように「～から」を伴わず、すなわち最も想定可能な要素を明示せず、「～に至るまで」のみで、スケール性のある全範囲が網羅されることもある。

5. スケール性を有さない範囲

以上スケール性を伴う「～に至るまで」について考察してきた。次に、スケール性を含まない場合について検討する。

スケール性を伴わない範囲には過程を表すもの、時間・空間を表すもの、並列的に範囲を表現するものが含まれる。各カテゴリー別に以下において考察する。

5.1 過程を表す範囲

過程とはある事態が時間軸に沿って、他の事態へと移行することを表すものである。移行の到達するところは「～に至るまで」に前接する語彙によって示され、視点がその到達点に置かれることによって、そこから見たそれまでの経緯が述べられる。

(14) 企画会議から制作に至るまで、「どんな情報を扱えばいいのか」「ほかでも見たことがある内容なのではないか」「こういう切り口なら面白いのではないか」、そんなネタの選定や番組独自の見せ方ととにかく時間がかかりました。(毎日新聞 2013 年 1 月 20 日)

(15) 髑髏(どくろ)の騎士の声を担当する大塚明夫さんがナレーションを務め、最終章に至るまでの長大なストーリーを解説する。(毎日新聞 2012 年 12 月 14 日)

上記の例 14 では「制作」が、例 15 では「最終章」が到達点として示され、そこから見たそれ以前の道筋が表現されている。例 15 でわかるように「～から」を伴った起点は省略される場合もあり得る。

過程を表す「～に至るまで」と頻繁に共起する表現として何らかの過程の到達点・終点を表す以下のような語彙群がある。

表 1 過程を表す「～にいたるまで」と頻繁に共起する到達語彙

到達語彙のタイプ	語彙の例
肯定的意味を持つ到達語彙	成功、勝利、完成、デビュー、入学、卒業、就職、成人、結婚、回復、復興、退院
否定的意味を持つ到達語彙	破滅、絶滅、自滅、滅亡、原爆投下、敗戦、離婚、事故、死、自殺

上記の表からも窺えるように、これらの語彙は肯定的であっても(例 16～18)、否定的であっても(例 19～21)良い。

(16) 失敗しても、諦めなければ「成功に至るまでの経験」に過ぎないってことを。(毎日新聞 2013 年 3 月 31 日)

(17) 成長過程も見てもらおうと、完成に至るまでのスケッチやデッサンも並べた。(毎日新聞 2013 年 2 月 24 日)

肯定的な意味を持つ到達語彙の中には否定的状況から肯定的な状況への好転を表現するものもある。「回復」「復興」(例 18)「退院」などはその例である。

(18) 企画調整総室に配属される菅野拓さん(22)が「復興に至るまでの道のりは長く険しいが、県民の悩みに寄り添いながら、震災前より素晴らしい福島を築き上げていくため力を発揮

したい」と誓いを述べた。(毎日新聞 2013 年 4 月 2 日)

- (19) 満州事変から敗戦に至るまでの日本の外交が、それぞれの局面でどう間違ったのか、現実にとりうる他の選択肢はなかったのか。(毎日新聞 2010 年 10 月 19 日)

- (20) 「コリーダは闘牛の意味で、男と女は牛と闘牛士のようにお互いにじらしながら深みにはまり、死に至るまで闘い続ける。好色漢から聖者にまで昇華する姿を描きたい」

(毎日新聞 2013 年 1 月 16 日)

- (21) 委員会は 456 人の当事者から聴取し、第三者の立場から今一度、甚大な事故に至るまでの経緯につき客観的な脈絡を立てて実証する手法をとった。(毎日新聞 2012 年 1 月 15 日)

これらの表現は経過語彙、例えば「経過」「過程」「プロセス」「経緯」「いきさつ」「道のり」「道筋」「推移」「行程」等を伴って現れる場合が多いが、そうではない語彙を伴うこともある。更に、これらは連体修飾の形で文中に現れることが多い。経過語彙で示される終点までの、過程全体に焦点を当てて述べる場合が多いからだと言えよう。しかし、例 20 のように連用形で現れる場合もある。

5.2. 時間的・空間的範囲

次にスケール性のない範囲として位置づけ可能な時間的・空間的範囲について考察する⁽⁷⁾。

5.2.1 時間的範囲

「～に至るまで」は時間的表現と共起し、ある出来事が成立する時間的範囲を表現する。頻繁に共起する時間的表現として現れるのは、「今」「今日」「現在」「近年」などである。例 22、23 のように発話時を基準とした時点（「今」）・時期（「現在」）を到達点として表現する場合もあれば、例 24 のように発話時以前のある時点までの到達を表す場合もある。

- (22) ストーンズは周知のごとく、一九六〇年代前半から現在に至るまで、ほぼ半世紀にわたり活動しつづける「世界最強」のロックバンドである。(毎日新聞 2011 年 8 月 14 日)

- (23) 1 枚の風刺画が、そんな時代の不安定な空気を語ってみせる。今に至るまで新聞は、どの日の紙面を引き抜いて見てもこうした「語り」があちこちの面に載っているだろう。

(毎日新聞 2013 年 2 月 21 日)

- (24) 目黒区めぐろ資料館には、主に大正(1912～26 年)末期から昭和の 1970 年代に至るまでの風景、町並み、人物を写した貴重で懐かしい写真や 8 ミリフィルムが多く残されている。

(毎日新聞 2013 年 2 月 22 日)

また、次の例 25 のように範囲は明示的には述べられてはいないものの、「～に至るまで」によって表される時間的範囲の終点とその起点をも含意し得る場合も見られる。例 23 では、「～から」によって起点が明示されていない。しかし、この文脈では新聞が発行された当初が起点となっていると解釈できる。更に、先行する文脈や文の一部の要素から起点となる時点の情報が読み取れる場合がある。例 25 では、起点が明治時代であることが「ランドセル」にかかる連体節によって示されている。

- (25) 明治時代に生まれたランドセルは、今に至るまでほとんど形を変えることなく小学生の教科書や学用品を運ぶ「かばん」として愛用されている。(毎日新聞 2012 年 4 月 16 日)

上述のように「～に至るまで」に先行する語彙として「今」及び「今日」が用いられる場合、起点からの膨大な時間幅が想定される。従って、より規定された時間幅を表現する「今週」「今年」

などは「～に至るまで」と共起する時間的語彙としてそぐわない。これらは明確で、具体的な時間幅を表すからである。それに対して、「今」「今日」「現在」は不明瞭な時間幅を意味し、しかもその時間幅は「～に至るまで」によって表現される幅広い時間帯の終点となっている。このように「～に至るまで」に先行する時間語彙は幅広い時間的範囲を捉えるものでなければならない。しかし、幅広いと話し手が意識する時間帯であれば、具体的に規定された時間帯についても「～に至るまで」を用いることは可能である（例 26）。

(26) 技師の経験が生かされる職場を希望したが、配属されたのは西陣織や染色業など伝統産業の振興を担当する部署。それ以来、現在に至るまで、一度も技師として働いたことはない。

（毎日新聞 2013 年 3 月 6 日）

時間的範囲を表す場合、スケール性を含意しないので、「～に至るまで」の「に至る」の部分を省略し、「まで」のみで表現できる。但し、「まで」自体は「～に至るまで」のような時間的範囲の広さを意味しない。例えば、次の例では下線部が示しているように限定的な時間しか表示されていない。

(24') 目黒区めぐろ資料館には、主に大正（1912～26 年）末期から昭和の 1970 年代までの風景、町並み、人物を写した貴重で懐かしい写真や 8 ミリフィルムが多く残されている。

時間幅の表現に時間性を含んだ対義表現が用いられる場合がある。例 27 が示している通り、対義語であっても時間的過程の一環を表すものであれば、スケール性を含意しない。同様に後述する並列的範囲の中にも時間性を含んだものが見られる。この場合も段階性が認められなくても、時間軸に沿って進行する過程を表すため要素間の相互入れ替えが不可能である（例 36）。

(27) 彼らは多くの著作で触れられており、評価もそれなりに定まっているので、今さら改めて出生から死没にいたるまでをきちんと描くのには食指が動かない、ということもあるのだろう。

（毎日新聞 2013 年 1 月 6 日）

5.2.2 空間的範囲

この用法における「～に至るまで」は場所・空間の概念を表す語彙と共起し、ある出来事が行われる範囲を述べる（例 28、29）。更に、例 30 のように「～に至るまでの」の形を取った連体形で用いられる場合は、ある対象の空間的広がり範囲を表現する。例 30 の場合表現されている空間的広がり範囲とは話し手の目にした多摩から美ヶ崎までの範囲である。

(28) 浅草の禪スナックに始まり、上野のラプドール工場にいたるまで、北区、荒川区、文京区、足立区、葛飾区、江戸川区、江東区、墨田区、台東区といった東京の「右半分」に点在する、百カ所を超えるスポットを取材したルポがこの『東京右半分』だ（そこには、新宿の風俗資料館と、閉館になった品川の「船の科学館」のルポも追加されている）。

（毎日新聞 2012 年 4 月 29 日）

(29) 以後、南米、アフリカ、東南アジアにいたるまで、世界の森にこの奇っ怪な虫を追う。

（毎日新聞 2011 年 9 月 11 日）

(30) しかし、やがて旬日を経てここから出られることがわかってみると、多摩から美ヶ崎にいたるまでの太い幹のような経緯がはるか彼方に見え、幹のわきのこまかい小枝が間近に見えてきた。

（冬）

空間的範囲を表す場合も時間的範囲の場合と同様にスケール性を有さないで、「～に至るまで」

の「に至る」を省略し、「まで」のみで表現できる場合がある。但し、例 28 では、「～はじまり」という起点を表す表現と共起しているため、「～に至る」の省略は構文上不自然である。同例の「～始まり」を「浅草の禪スナックから」に置き換えれば、「まで」に言い換えても不自然さは感じられない。

同様に例 29 の場合も「～に至るまで」に先行する名詞句「南米、アフリカ、東南アジア」によって表現される空間は広がりを持ったものであるため、「～に至る」は省略できない。

置換可能な場合でも「～に至るまで」と「～まで」の表現に話し手の捉え方の違いが認められる。「～に至るまで」の場合にはその範囲の広がり的大小さが表現される。一方、例 31 及び 31' が示している通り、「まで」のみで範囲が表現される場合は広がり的大小さに話し手の焦点が置かれずに、客観的に範囲限定が行われる。

(31) 南禅寺から嵐山まで紅葉が見頃だ。

(31') 南禅寺から嵐山に至るまで紅葉が見頃だ。

上記の二つの文から窺われるように、「まで」のみの場合、紅葉が見頃である範囲を限定しているだけである。

(31'') * 南禅寺から、鴨川、大徳寺、金閣寺、嵐山まで紅葉が見頃だ。

(31''') 南禅寺から、鴨川、大徳寺、金閣寺、嵐山に至るまで紅葉が見頃だ。

上記の例では、「鴨川」「大徳寺」「金閣寺」は範囲の広がりを示す要素として現れている。「まで」は単なる範囲を表すので、それらと共起しない。一方、「～に至るまで」は範囲の広がりを強制的に述べるという表現効果があるのでそれらと容易に共起する。

5.3 並列的要素により表現される範囲

このタイプの範囲表現においては、話し手が主観的基準によりある事柄の対象となる要素を選定し、並列することで、その該当する対象全体が網羅的に表現される（例 32、33）。例えば、例 32 では、多大な影響を受けた画家としてゴッホ、モネ、ドガ、ロートレック、現代のピカソが話し手の主観的基準により選定され、それらによって、該当する画家の全範囲が網羅的に示されている。更に、種類の豊富さを表す場合が見られる。例 34 はその例で、「ありとあらゆる」という表現の共起により、エンタテインメント文化の種類の豊富さが強調されている。

(32) その多彩な図柄は江戸庶民のみならず、フランスを中心とした欧州の印象派の画家から“北斎スケッチ”と呼ばれ、ゴッホ、モネ、ドガ、ロートレック、現代のピカソにいたるまで多大な影響を与えた。
(毎日新聞 2012 年 10 月 5 日)

(33) 私生活から美術、政治や経済との関わり、日本との関係にいたるまで、とにかく彼と関わりのあることは恐らく殆どすべて説明されていて、超肥満化したすばらしい本である。
(毎日新聞 2011 年 10 月 9 日)

(34) 「メインストリーム」とは、本書では娯楽映画、ポピュラー音楽、テレビ番組から、通俗読物やマンガ、アニメ、ゲームにいたるまで、およそありとあらゆる種類のエンタテインメント文化を指している。
(毎日新聞 2012 年 10 月 28 日)

これらにおいて全範囲が網羅されることは例 33 の「すべて」のような全称を表す表現が共起されることから窺える。

このタイプの範囲の要素として並列される要素間にスケール性が見られるものとそうでないも

のがある。次の例は前者のタイプのものであり、並列的要素間に段階的スケール性が見られる。

- (35) 中央から地方の行政単位、企業組織、住民自治会などに至るまで党組織が張り巡らされています。
(毎日新聞 2012 年 11 月 15 日)

スケール性を表さない範囲であるか否かは並列された要素の相互入れ替えの可否によって判断できる。すなわち、スケール性がない場合は話し手によって恣意的に並べられているので、入れ替えが可能となる。例 32' でそれを検証してみよう。

- (32') その多彩な図柄は江戸庶民のみならず、フランスを中心とした欧州の印象派の画家から
“北斎スケッチ”と呼ばれ、ロートレック、ドガ、モネ、ゴッホ、現代のピカソにいたる
まで多大な影響を与えた。

(32') が示している通り、並列の順序を入れ替えても全範囲を示すことには変わらない。

「～に至るまで」と共起する並列表現は単なる並列された集合を表すというより、その集合の広がりも表していると捉えることができる。次の例 36 では製造・販売過程が一続きの時間的広がりとして表現されている。このような時間軸に沿った一連の過程を並列的に述べる場合、要素間の入れ替えは不可能である。その理由は時間軸に沿った過程を示すものでなければならぬからであり、しかも各要素がその過程の重要な一環をなし、欠くことができないものだからであると言える。

- (36) 「TULLY'S COFFEE」ブランドのボトル缶コーヒーは、コーヒーに関する高い技術と幅広い知識をもつ「タリーズコーヒー」のバリスタが、原料、焙煎、抽出方法、デザインに至るまで監修したコーヒー飲料です。
(毎日新聞 2013 年 3 月 15 日)

- (37) ものづくりの面では、福井県第一の製造業の一層の振興を図るため、05 年度に「越前市産業活性化プラン」を策定（10 年度改定）し、研究開発から販路拡大、特許取得に至るまで一貫した企業への支援を行っています。
(毎日新聞 2011 年 7 月 8 日)

時間的な並列であっても、上記の例 37 の「販路拡大」及び「特許取得」のように時間的順序性が認められない場合その要素の入れ替えは可能である。

更に、要素を並列し、範囲を表現する場合、要素の並列に「や」「と」などの並列助詞が用いられることがある（例 38、39 及び例 50）。

- (38) 近年はエレンさんの妹夫婦と一緒にやって来て芝刈りや庭の植物の世話、家やその周囲の掃除にいたるまでの面倒を見ていた。
(数学)

- (39) また他ブランドのスーツ、シャツ、ネクタイ、鞆、靴、肌着等、メンズ商品と、パンプス、ストッキング、フォーマルバッグなどウイメンズ商品に至るまで国産製品販売に注力しています。
(毎日新聞 2012 年 11 月 15 日)

6. 「～に至るまで」を含む文の共通特徴

以上の考察から明らかになるように、「～に至るまで」を含む文に共通する特徴として、起点を表す「～から」を伴う語彙及び助詞「まで」によって表現される到達点を表す語彙が共起していることが挙げられる。すなわち、以下の例 (40) では「～から」に先行する語彙は範囲の起点を示し、一方「～に至るまで」に先行する語彙は到達点を示している。

- (40) 木から石に至るまで、すべてのものには息吹があり、そこに神が存在するというのが神道

です。

(毎日新聞 2013 年 2 月 25 日)

(41) 日本は占領時代から今日に至るまで「米国の保護国」とみる。

(毎日新聞 2012 年 9 月 25 日)

上記の文では起点や到達点は一つの個別的な事柄で捉えられている。しかし、「～に至るまでに」を含む文の起点及び到達点が全て個別的な事柄で表されるわけではない。例えば、例 (42) では両者ともある一定の幅を有するものである。そのことが起点・到達点のいずれの場合も「など」との共起によって明示されている。同様な機能は並列助詞「や」も果たす (例 43)。更に、「～から」の反復により、起点の幅を強調することも可能である (例 44)。

(42) 「赤とんぼ」など童謡・唱歌から「源氏物語」「春望」など古文・漢文に至るまで、どこかで耳にした懐かしいフレーズがいっぱいだ。

(毎日新聞 2012 年 2 月 1 日)

(43) 中間報告では、地震・津波被害によって生じる混乱や、がれきの処理など復旧に至るまでの日程を立てたシナリオの骨子を作り、対策の前提としている。

(毎日新聞 2013 年 2 月 14 日)

(44) 首相の起床時間から株式市況から一家心中から夜食の作り方、スカートの丈の長さ、レコード評、不動産広告に至るまでの何もかもである。

(世界)

起点が「～はもちろん」によっても示され得ることは既に森田・松木 (1989) によって指摘されている通りである⁽⁸⁾。次の例では、「～はもちろんのこと」との共起により、「“油そば”に対するこだわり」に該当する想定可能性の高い要素 (麺やタレ) から、「～に至るまで」の表す可能性の低い要素 (トッピングの具材の選定) までの該当範囲を表している。

(45) 麺やタレはもちろんのこと、トッピングの具材の選定に至るまで、“油そば”に対するこだわりと妥協のない姿勢から、幅広いお客さまに支持されています。

(毎日新聞 2013 年 1 月 10 日)

起点表示のために「から」の代わりに「～をはじめ」 (例 46) 「～に始まり」 (例 47) などの表現が現れる場合もある。

(46) 農業委員 35 人のうち 17 人が編集に携わり、取材をはじめレイアウト、見出し付け、広告取りに至るまで大半をこなした。

(毎日新聞 2013 年 4 月 5 日)

(47) 国家政策により婚姻させられた李方子と愛新覚羅浩に始まり、日本が生んだ中国スター・李香蘭 (山口淑子)、そして「ジャバゆきさん」に至るまで、重い事実の扉を開けてゆく。

(毎日新聞 2012 年 12 月 26 日)

また、例 48 のように「果ては」が共起した場合、「～に至るまでに」に先行する表現 (つまり、ストリートカルチャー) は、想定可能性のスケールの低い要素であることが更に強調される。

(48) 偏に科学にとどまらず、メディアから政治、果てはストリートカルチャーに至るまで、現代社会をさまざまに動かすダイナミクスの現場でも、既存の人間像は日々空洞化しているように見えるのです。

(毎日新聞 2010 年 10 月 6 日)

5.3 節でも取り挙げたように、「～に至るまで」は範囲全体についてある叙述をするのに用いられるため、後続する節に「全部」「すべて」などの全称表現が現れる場合がある。

(49) 聞くとところによると、以来半世紀余、文科系総長は滝川さんが最後で、松本さんに至るまでの歴代は全部理科系だという。

(毎日新聞 2010 年 11 月 17 日)

(50) 私は別の場所から、私と医者と看護婦と、手術室の無数の用具に至るまでの、すべての光

量を確かに見ていたのです。

(錦繡)

なお、「～に至るまで」によって表現される出来事のタイプに着目すると出来事描写文が最も多い。故に、原則として命令、依頼、願望等の述語とは共起しない(例 51')。但し、「～に至るまでの」の形を取った連体用法では以下のような例も見られる(例 51)⁽⁹⁾。

(51) どうか瀬尾由加子さんと京都のデパートで再会してから、あの嵐山の旅館に至るまでの道筋をお書き下さいませんか。(錦繡)

(51') ???嵐山の旅館に至るまで道筋をお書き下さいませんか。

7. 終わりに

以上見てきたように、「～に至るまで」の共通した基本的な特徴はある物事の範囲の広さに着目することである。そして、「～に至るまで」で描写する範囲はスケール性の有無によって大別可能である。スケール性を有する範囲を(1) 極限的スケール表す範囲、(2) 数量的スケール表す範囲、(3) 段階的スケール表す範囲の三つのタイプに分類し、考察した。

一方、スケール性を有さないものとして(1) 過程を表す範囲、(2) 時間を表す範囲、(3) 空間を表す範囲、(4) 並列的範囲を取り挙げた。

並列的範囲を表すものの中には時間軸に沿って並べられた要素もあり、その場合は時間及び並列のカテゴリーの融合が見られる。一方、範囲内の並列的要素により何らかの段階性が認められる場合もある。本稿では、このような例を、段階的スケールを有するものとして分類した。

以上の考察を通して、「～に至るまで」という表現においては、「まで」の表す終点に動詞「至る」の表す到達点までの広い範囲という意味が付加されることが明らかになった。すなわち、「から」や「まで」という表現では範囲の起点及び終点しか捉えていないのに対し、「～に至るまで」の表現においてはその終点のみならず、そこまでの範囲の広さも重視され、強調されていると見なすことができる。この特徴は一貫した基本的特徴として、以上のどのカテゴリーにも当てはまるものである。

更に、終点を表現する故、「～に至るまで」を「まで」に置き換え可能な場合があることを本稿において考察し、時間的範囲及び空間的範囲を表す場合をその例として示した。しかし、両者の置き換えが可能になる詳細な条件については十分に明らかにできなかった。置換を許す諸条件を解明することを今後の課題としたい。更に、「さえ」の表すスケールについての比較検討も今後の考察対象とする。

時間的・空間的範囲を表す「～に至るまで」の類義表現として「～にかけて」が挙げられるが、その異同の分析は別稿に譲りたい。

また、「はじめに」の節において述べたように「～に至るまで」はN1 レベル日本語の機能語として位置付けられている。日本語教育における指導法の提案やそのための教材作りも今後の課題とする。

注

- (1) 現行の日本語能力試験ではN1レベルに該当する。なお、この表現は上級の日本語教科書にほとんど取り挙げられていないが、N1～N3レベルの文型を扱う友松他(1996)の『どんなときどう使う日本語表現文型 500』では起点・終点・限界・範囲を表す表現として取り挙げられている。同書では、「『ものごとの範囲がそんなことにまで達した』と言いたいときに使う。上限を強調して表すのであるから、極端な意味の名詞に接続する。(p.28)」と解説している。しかし、「極端な意味」の名詞にどのようなものが含まれるのか、「そんなことにまで達した」の示す限界的意味とはどういったものか詳細には述べられていない。また、スケール性を有さない時間的・空間的範囲を表す用法の例も記載されていない。
- (2) 国際交流基金編(1994, p.151)において「<機能語>類」は「『～に関して』『～に至るまで』(中略)のような、‘助詞・助動詞そのものではないが、これに類するもの’」として位置付けられている。
- (3) 同書では助詞「に」及び「へ」との比較の中で説明されている。この例の「まで」は格助詞であり、格助詞においても範囲の終点を表す用法が見られることを示している。なお、寺村(1991)では、序列の意味を表す「まで」が取り立て助詞として位置付けられている。一方、奥津他(1986)では、「まで」に格助詞、順序助詞、形式副詞、とりたて詞の4種類を認めている。しかし、「～に至るまで」の「まで」は、省略できない点(それに対して「珍現象までが起こった」の場合は、「珍現象が起こった」という風に「まで」を省略することができる)、及び「の」以外の助詞を伴うことができない点(「成功に至るまでの経験」のように連帯節内に頻繁に用いられるが、「珍現象までが起こった」のように格助詞との相互承接を許さない)において同書の定義するとりたて詞とも異なっている。
- (4) 原文では「AからBまでに」となっている。A=起点、B=到達点への置き換えは筆者。
- (5) 但し、4.3節で取り上げる段階的スケールの場合、起点的要素であるAと終点的要素であるX以外の要素も文中に並列的に現れる。
- (6) この例は時間軸に沿った広がりを示す時間的範囲を表現しており、その点からしてもスケール性を表すことのできない類のものである。また、後続する「洋の東西を問わず」という表現によっても示されている通り、述語の出来事が該当範囲において均質的に成立していることをも表している。
- (7) 寺村1991は助詞「まで」について強調的表現効果を発揮する場合を認め、「序列のなかの最下位にあるものを持つてくることによって、その他のもの(序列で上に位するもの)については言うまでもないという含みをもたせ、結局、事態の異常なことを強調しようとする(p.117)」と説明している。更に、「『Nマデ』が強調的な表現効果を発揮するのは、(中略)Nが時間・空間上の一点を示すという意味特徴を元来もたないものである場合である(p.116)」ことも指摘している。
- (8) 「もちろん」は、スケールを表すとりたて助詞「まで」「さえ」とも共起可能である。「さえ」と共起する際には、極限に焦点を当て、起点から終点までの全範囲を網羅的に表すのではないと考えられる。一方、「まで」は終点を表すので、そこまでの過程も含意する。しかし、全範囲を強調的に述べるには起点の「から」の共起が必要である。「まで」も「さえ」も極限を示すためにも用いられるが、「さえ」によって表現される極限は、「～に至るまで」が示すような連続体の最下限としての極限ではなくとも良いと考えられる。
- (9) 但し、「全て」などの全称表現を伴う場合は許容度が上がる(「どうか瀬尾由加子さんと京都のデパートで再会してから、あの嵐山の旅館に至るまで、道筋をすべて、お書き下さいませんか」)。その理由は、全称表現は少ない程度・量に対して使われるのではなく、広い範囲に対してそもそも使われるからであると考えられる。

用例出典

(あすなろ):『あすなろ物語』, (雨):『黒い雨』, (アメリカひじき):『アメリカひじき・日垂るの墓』, (美しき村):『風立ちぬ・美しき村』, (王様):『パニック・裸の王様』, (女社長):『女社長に乾杯!』, (風):『風に吹かれて』, (錦繡):『錦繡』, (草):『草の花』, (国盗り):『国盗り物語』, (剣客):『剣客商売』, (恋

人)：『エディプスの恋人』，(孤高)：『孤高の人』，(さぶ)：『さぶ』，(塩狩峠)：『塩狩峠』，(死者)：『死者の奢り・飼育』，(忍ぶ)：『忍ぶ川』，(少女)：『聖少女』，(植物)：『砂の上の植物群』，(人生)：『人生論ノート』，(新橋)：『新橋烏森口青春篇』，(数学)：『若き数学者のアメリカ』，(砂)：『砂の女』，(世界)：『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』，(戦艦)：『戦艦武蔵』，(竖琴)：『ビルマの竖琴』，(太郎)：『太郎物語』，(小さき者)：『小さき者へ・生れ出づる悩み』，(沈黙)：『沈黙』，(点)：『点と線』，(夏)：『一瞬の夏』，(楡家)：『楡家の人びと』，(野菊)：『野菊の墓』，(野火)：『野火』，(二十歳)：『二十歳の原点』，(花埋み)：『花埋み』，(冬)：『冬の旅』，(ブン)：『ブンとフン』，(放浪記)：『放浪記』，(モオツァルト)：『モオツァルト・無常という事』，(山本)：『山本五十六』，(雪国)『雪国』，(檸檬)：『檸檬』以上『新潮文庫 100 冊 (CD-ROM 版)』に収録されている作品。その他：(アップル)：『誕生日のアップルパイ』文藝春秋，(予言)：『百年の預言』，朝日新聞，毎日新聞

参考文献

- (1) 泉原省二 (2007) 『日本語類義表現使い分け辞典』 研究社
- (2) 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 (1986) 『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社
- (3) 金水敏・工藤真由美・沼田善子 (2000) 『時・否定と取り立て』 岩波書店
- (4) グループ・ジャマシイ編 (1998) 『日本語文型辞典』 くろしお出版
- (5) 国際交流基金 (1994) 『日本語能力試験出題基準 [改訂版]』 凡人社
- (6) 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版
- (7) 友松悦子他 (1996) 『改訂版どんときどう使う 日本語表現文型 500』 アルク
- (8) 中西久美子 (1995) 「もとマデとサエ・スラ ——意外性を表すとりたて助詞——」 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』，pp.306～316，くろしお出版
- (9) 難波真奈美 (2004) 「『～まで』の意味・機能：—<格>と<とりたて>の連続性」『阪大日本語研究』 16, pp.115～130.
- (10) 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法 2 第 3 部 格と構文』 くろしお出版
- (11) 宮島達夫 (1972) 『国立国語研究所報告 43 動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
- (12) 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』 アルク
- (13) 藪崎淳子 (2010) 「高程度」のマデ」『文学史研究』 pp.56-68, 大阪市立大学国語国文学研究室文学史研究会

(京都大学国際交流推進機構国際交流センター・教授)

(AKP 同志社大学留学生センター・日本語科講師)

The Roles of Scales and Boundaries in Expressing Ranges: An Analysis of the Japanese Expression *Ni Itaru Made*

Ruchira Palihawadana, Tomiko Kuwahira

Abstract

This paper reveals the properties of ranges and scales implied by the Japanese expression *~ni itaru made*, meaning ‘extends to ~’. By denoting the boundary point of a certain range, *~ni itaru made* expresses the limits of its reachability, and thereby emphasizes the wide range of the applicability of the predicative expression. The element indicating the boundary reached syntactically precedes *~ni itaru made* and must explicitly appear in the sentence. Since this element stands for the limits that are reachable, it serves as the least conceivable member of a set, implying the existence of more conceivable members belonging to the same set. The most easily conceivable member on the other hand, may or may not appear in the sentence explicitly. When it does appear, it follows the particle *~kara*, which denotes the starting point of the range, consequently expressing the complete range explicitly.

Scales implied by *~ni itaru made* can be categorized into 1) extremity scales, 2) numerical scales and 3) gradually decreasing scales. The lexical meaning of the phrase preceding *~ni itaru made*, denoting the least conceivable member of the set, characterizes the first two categories. In the first category this phrase indicates a pointed tip or the partner of an antonym pair, which functions as a semantic ‘threshold’. In the second category, the numeral 1 followed by a counter, implying a minimal amount, serves as this phrase. And in the last category, the parataxis group of words, each expressing different degrees of the predicative state, are arranged in decreasing order to form the scale.

However, the ranges expressed by *~ni itaru made*, do not always possess scalar properties. Temporal ranges as well as spatial ranges emphasize temporal or spatial expanse without indicating different degrees of applicability. Parataxis ranges on the other hand could be of either type. When the elements compose different phases of a single procedure, which are temporally arranged, the expressed range is free of scalar implications. The elements moreover could simply be members of a set with no temporal or decremental relationship, thereby forming a scale-less range. In the latter case, these elements allow mutual substitution.

(Professor, The International Center, Kyoto University)

(Japanese Language Instructor, Associated Kyoto Program, Doshisha University)